

教育実習前後における学生の授業意識

アンケートによる調査から

Student Teacher's Image of Instruction before and after Teacher Training.

貫井 正納・市川 洋子・吉田 雅巳*

Masanori NUKUI・Youko ICHIKAWA・Masami YOSIDA

<あらまし> 教育実習を受けた教育学部4年の学生を対象に、実習の初日と最終日に授業についての意識を質問紙を用いて調査した。実習前には子どもを主体にした授業をイメージしていたが、実習後には必ずしもその通りには行かなかったこと、授業中の子ども達の反応が予想していた以上によく驚いていた。また、実習生は実習を真剣に取り組んでおり、指導教官の存在を高く評価していた。

<キーワード> 教育実習 小学校教育 授業意識 教師教育 教育測定

I はじめに

一般に授業とは教材を媒介とした教師と子どもたちによる社会的な相互作用であり、そこでは子どもたちに一定の知識や技能や能力の獲得を目指して導かれる活動といわれている。同時に、教室等における子どもたちは、教材として取り上げた内容の認識や技能を獲得する認知的な活動だけではなく、子どもどうし、自分と他の人との相互の関わりを作り上げたり、子ども自身の自立的、協同的な態度の育成をもしている。しかし、現在の学生にとって、授業は高等学校以来、教師による一方的な知識の伝達が主体であり、教師と学生・生徒間の発問と応答や、学生・生徒どうしの討論を行った経験は非常に少ない。従って、学生の抱いている授業観は知識伝達に偏っていることが、授業中の学生の態度から考えられる。学生の抱いている授業観については、小野寺¹⁾は教育学部生が授業をどの様に捉えているかを比喻生成法で探った。その結果、学生の教職に対する志望度の高低によって、子どもへの配慮や授業の反省、及び授業の場における教師と子どものかかわり方の差が生じていることを示した。秋田²⁾は学生と現職教員の授業イメージの比較から、学生はすでに授業に対して明確なイメージを形成しているが、それは現職教員とは異なり、授業は筋書き通りに伝達する場として捉えていることを示した。このような、授業観を持った学生が、教育実習に参加し、授業を実施したとき、当然その授業観に変化が見られるものと思われる。本調査は、4年次学生の4週間にわたる教育実習の前後における意識の変化を質問紙を用いて調べた。自由記述によるアンケート調査の結果³⁾や、イメージマップによって実習生の授業観を調べた結果⁴⁾では、実習前では明るく活気のある楽しい授業や子ども主体の授業など理念的な項目が多かったが、実習後になると授業を構成している項目が増加し、授業経験によって得られた結果が多く見られた。今回の調査は、授業にどのような要素を考えているか、また、それら要素間の関連がどのようになっているのかを、実習の前後をに行い、授業経験が学生にどのような影響を与えているのかに注目した。

II. 方 法

1. 問題の作成

教育実習生が授業に対して抱いている意識を調べるために、原岡⁵⁾が作成した教師の成長についての質問項

* メディア教育開発センター 千葉大学教育学部

Faculty of Education, Chiba University, National Institute of Multimedia Education

目を参考にし、教育実習生の授業に適合するよう、63項目のからなる質問紙を作成した。

2. 調査時期

1998年4月から10月にかけて実施された3回の教育実習時に行った。各実習とも実習前の調査は初日に質問紙を配布し、翌日回収した。ついで、実習後の調査は実習の最終日に初日と同じ用紙を配布し、実習ノートを提出時（1週間以内）に回収した。

3. 対象 千葉大学教育学部附属小学校実習生207名

4. 結果の処理

回答は、「1 そう思う」から「5 そう思わない」の5段階で求め、それぞれに得点を与え、各項目毎の平均点と標準偏差を求めた。

Ⅲ. 附属小学校における教育実習

千葉大学教育学部における教育実習は平成13年度から3年次に行われるようになるが、現在までは次のような流れによって行われている。3年次の後期に教育実習事前指導の一環として、教育実習オリエンテーションが行われている。そこでは、学部教員によって学校教育全般の内容が話され、そして、附属学校教員によって具体的な授業や種々の行事等について講義が行われる。その後、小学校教員養成課程の学生は、各教科領域ごとに附属学校教員による指導を受ける。中学校教員養成課程の学生は、教科別に分かれて附属学校教員による指導を受けている。また、観察実習として3日間、4年次に実習を行う学校へ行って、その時本実習をしている実習生の授業を観察してくる。

本学の附属小学校では4年次学生が約60人ずつ3回に分け、教育実習が行われている。通常低学年には学級2名、その他の学年では2～4名の学生が配当される。学生の4週間わたる実習内容は次のようになっている。

第1週：児童の実態把握の段階とし、児童の名前を覚えることを最優先する。同時に学級経営、生活指導について、教材研究の方法、指導案の立案、学習指導の方法の指導を受け少くとも1時間の実地授業を行う。

第2週：学年、学級共同実習の段階とし、実習生の授業観察、反省会を行う。次いで学年経営、各教科指導法の指導を受け、1～2時間の実地授業を行う。

第3週：教科、領域別共同実習の段階とし、教科、領域についての指導と1～2時間の実地授業を行う

第4週：総合、精練実習の段階で、精練授業、全日実習、他校参観をする。

以上の計画のもとで、各学生は最低で8時間位の授業を実施する。

Ⅳ. 結果と考察

1. 実習後に否定的傾向に変化した項目

実習前には「そう思う」と肯定的に考えていたことが、実習を経験することにより「思わない」というように否定的に変わっていった項目である。表1から、全体27項目中11項目が平均点2未満の「そう思う」と肯定的に考えていたが、実習後になると3項目に減少した。特に大きな変化を示した項目として、平均値の差が0.60以上の項目で差の大きい順見ると、質問番号、11、27、32、19、16、62、30、48、62となった。この中には、子どもを主体とする授業に分類された項目については全てが含まれていた。そのほか実習生の自己の成長に関する項目が3項目、授業の実践に関する項目が1項目であった。

実習前後で平均値の差が大きく現れた子どもを主体とする授業については、質問項目19が平均値2.0を少し上回るが、あとは全て2.0以下で標準偏差も小さく、多くの実習生が子ども主体の授業が望ましいことと考えていた。このような授業は、学部における各教科・領域についての授業や実習オリエンテーション等で附属学校の教員から直接よく聞いていることである。前述の実習前後に実施したイメージマップの調査においても、子ども中心にした授業という言葉は多く現れていた。しかし、実習生は理想的な授業形態として、子どもを主体とした授業をイメージしてきたが、実際の授業では、その実現が非常に難しく、実践できなかったこと、ま

た、高等学校、大学で経験してきた従来型の知識伝達式の授業による授業観の影響が大きく、実習生本人も知識としてとらえてはいるが、実習の場において、授業行動として実現できなかったことが考えられる。質問番号48, 17などは子どもの気持ちを配慮をしながら対応することの難しさを表している。子どもを支援することが、子ども主体で行おうとしても、考えていたようにはいかなかったことが伺える。質問番号11, 16, 30, 44, 29, 28等の教師自己の成長に関わる項目では、事前では平均値が2.0未満とかなり多くの実習生が肯定的な考えを示し、実習を通して自己成長を考えていたが、実際の実習では忙しく、自分自身のことを振り返ってみる余裕が持てなかったのではないかと考えられる。特に、前後の差が大きい11では余裕が持てなかったことを端的に示している。子どもの理解の項目における質問番号18や22のように子どもの立場に立って考えることができず、まだ子どもを十分に捉えられていない状況や、子どもとの接し方に戸惑いを感じている様子がうかがえる。教材研究と授業との関係では準備が万全であっても授業がうまくいくとはかぎらないことを示した。平均値の差は小さいが、43のように授業の流れがスムーズにいかないことを実感している。

表1 実習後に否定的傾向を示した項目

	質 問	事前M	事前SD	事後M	事後SD	
子どもを主体とする授業	62. 子どもの意見を尊重する	1.560	0.721	2.248	1.002	*
	32. 子ども全員が参加できる授業をする。	1.739	0.864	2.500	1.138	*
	27. 子どもと一緒に考える授業をする。	1.884	0.851	2.683	1.074	*
	19. 子ども一人ひとりが主体になる授業をする。	2.048	0.918	2.762	1.066	*
授業の実践	48. 子どもが間違ったり、失敗することをおそれない授業をする。	1.667	0.892	2.302	1.004	*
	17. 押し付けたり脅かしたりしないで、子どもを指導していける自信がつく。	2.295	0.922	2.733	1.031	*
実習生の自己成長	26. 授業を通して、その子に何かを教えられる。	2.599	0.965	2.847	1.070	*
	25. 教育以外の分野にも、幅広い視野をもつことが大切だと感じる。	1.169	0.457	1.332	0.610	*
	28. 子どもと一緒に学習することが、自分の成長にもなる。	1.329	0.667	1.540	0.847	*
	20. 教育のことだけでなく、幅広い人間になるよう努めている。	1.541	0.799	2.129	1.033	*
	11. できるだけ幅広い分野へ興味や関心をもつよう努めている。	1.701	0.829	2.634	1.139	*
	16. 専門的知識だけでなく、幅広い分野の知識を得るよう心がけている。	1.961	0.955	2.668	1.148	*
	30. 一般社会の領域にも関心や問題意識をもつようになった。	2.029	0.929	2.688	1.158	*
	33. 子どもの成長を考え実践していくうちに、自分の成長に気づくことがある。	2.058	0.917	2.327	1.075	*
	44. 教科指導の方法を学んでいくうちに、専門的知識も深まる。	2.135	0.966	2.619	1.132	*
	29. 現状の子どもの姿に満足せず、より高い成長を考えている。	2.145	0.960	2.545	1.051	*
53. 自分が成長しているかどうか自分ではわからない。	2.754	1.179	3.015	1.340	**	
34. 新しい社会の流れをとらえて、適切な指導ができるようになった。	3.005	0.900	3.411	1.024	*	
子どもの理解	47. 子どもと同じ立場に立ち、子どもを人間として見る。	1.536	0.799	1.703	0.841	**
	18. 子どもの立場に立ってみてはじめて、子どもの気持ちや考え方が理解できる。	1.633	0.925	2.193	1.021	*
	13. 子どもの行動の観察から指導の在り方を学ぶことができる。	2.155	0.958	2.337	0.895	**
教材研究	22. 子どもに密着していると、かえって子どもの真の姿を見失うことがある。	2.995	1.082	3.376	1.212	*
	60. 子どもの心をとらえた教材を用意して授業をする。	1.957	0.861	2.520	1.066	*
	45. 教材研究を徹底して行うことによって、授業がうまく出来るようになる。	2.478	1.018	2.916	1.055	*
授業	63. 教材研究を十分やれば授業はできる。	3.285	1.089	3.540	1.164	**
	43. 授業の流れがとぎれない授業をする。	3.010	1.029	3.366	1.161	*
	54. 小学校の内容なので、簡単に教えられる。	4.599	0.703	4.743	0.633	**

** p<0.05 * p<0.01

2. 実習後に肯定的傾向を示した項目

実習前には「そう思わない」という傾向にあったものが、実習後には「そう思う」と肯定的に変化した項目で数としては9項目と少なかった。

実習生が自分の授業活動に不安を持って授業に臨んだところ、子ども達が比較的良好に対応してくれたことに対する実習生の驚きが、授業の実践の質問番号5, 1, 3, 9等に見られる。これらの平均点はいずれも3以上で、「どちらとも言えない」とやや否定的に考えていたことが、事後には肯定的な方向へ回答したことは、子ども達の活発で率直な反応が授業の効果として考えている。しかし、1, 9の項目に見られるように、授業では不安を抱えながら実践したら、予想に反してうまくいったと考えている。しかし、前述の子どもを主体とする授業では事後の方が否定的な傾向を示し、この項目との間では矛盾が生じている。授業が何とか思い通りにできた、また、納得のいく教科指導が出来たという判断は、指導案通りに授業が実践できたことを指しているのではないかと考えられる。子どもの理解に関する項目で、質問番号36, 50, のように子どもの多様性に気づいてきたことは、4週間にわたる子どもとの触れ合いの結果から来た実習の効果といえる。しかし、この2項目は比較的子どもの行動として表に現れるものであり、前述の表1に見られる子どもの理解で否定的傾向を示し

た項目が子どもの内面を感じ取るものであることとは違いがでている。その様な不十分なものではあるが、子どもの多様性に気づくことが、表1の子ども主体の授業予想に反しうまくいかなくても、子どもにとって良い授業であることに気づき、発展していくのではないだろうか。これは授業の本質をとらえる第一歩となりうる。日常生活の上では、指導教官の存在が非常に大きいことは質問番号58から伺え、それを一つの教師モデルとすることから、自分が何をすべきか自発的態度が見え始めている。

表2 実習後肯定的傾向を示した項目

	質 問	事前M	事前SD	事後M	事後SD	
授業の実践	5. 自分の指導に対し、子どもが手ごたえある反応をする。	3.015	0.932	2.465	1.003	*
	3. 自分の指導の効果が子どもに見られる。	3.150	0.966	2.782	1.033	*
	9. 納得いく教科指導ができる。	3.686	0.942	3.460	1.189	**
	1. 何かと思いどおりの授業ができる。	3.754	1.025	3.208	1.284	*
子どもの理解	36. いろいろな子どもに出会うことで子どもの多様性がわかってきた。	1.937	0.904	1.421	0.659	*
	50. どの子どもにも良い点を見つけることができる。	2.015	0.911	1.639	0.812	*
日常生活	58. 先輩の先生からいろいろ教えられ、多くのことを学ぶことができる。	1.710	0.844	1.421	0.770	*
	31. 子どもたちの日常のふれあいから多くのことを学び、人間的に豊かになった。	2.237	0.938	1.753	0.880	*
	37. 自分の役割が何で、今やるべきことは何かがわかる。	2.860	0.911	2.604	0.937	*

**p<0.05 *p<0.01

3. 実習前後で平均点に変化がなかった項目

表3に示したように、実習前後の平均値の差を比べてみて、その差が生じていない質問項目である。実習生の自己の成長では、項目全てにおいて肯定的な回答を示し、前後において平均値の差が生じていない。しかし、表1の同じ実習生の自己の成長では実習後に否定的変化の傾向を示している。表1の各項目を見ると、どちらかという、新しいものを求める発展的な行動を求めているのに対し、表3の項目では実習生の現状の資質のもとにおける努力を求めているというところに違いが見られる。この点は、実習生が実習を真剣に取り組んでいる様子が伺うことはできるが、前述のように、現在以上の知的収集活動は余裕がなかったことを示している。授業に対する自分の考えとして、質問番号10, 15, 21, 35, 23, では平均値の変化はないが、この中で、35については、指導案だけでは授業が順調に進むものではないことが意識されており、23のように小学校の学習内容であっても教材研究の必要性は強く感じていることは特記できる。これは、52の専門教科だけでは授業にそのまま役立たないこと、39, 8に見られるように子どもの実態に即し、かなり広範囲の材料を準備する必要があることについては、認識が不十分である。表2の子どもの理解において、子どもの多様性に気づいてきているが、この表からは、子どもの行動を学校内だけでとらえている傾向を示している。具体的な指導法についての質問番号21, 12, 8等は実習生にはその実体が、まだよく理解できないままの状態となっている。

表3 実習前後で平均点に差が生じなかった項目

	質 問	事前M	事前SD	事後M	事後SD
実習生の自己の成長	24. 自分の持ち味を最大限に生かすよう全力で事にあたるよう努めている。	1.638	0.763	1.782	0.865
	55. 自分の行動や生活態度などいつも反省するよう努めている。	2.135	0.941	1.985	1.010
	57. 自分で目標をたて、常にその実践に向けて努力している。	2.242	0.985	2.248	0.857
	42. どんな先生とも気軽に話せる雰囲気があるのでみんなと協調してやっつけられる。	2.435	0.927	2.431	1.229
	56. 努力しないと自分だけとり残されそうなので頑張っている。	2.507	1.061	2.396	1.160
	14. 自分に課題を課すことによって、自己規制に努めている。	2.594	1.119	2.762	1.108
授業に対する考え	10. 楽しい授業をする。	2.145	0.934	2.292	1.115
	15. 子どもが自由に意見を言える授業が出来る。	2.657	0.936	2.644	1.075
	21. 子どもの理解力に応じ自然に指導法を変えられることができる。	3.140	0.968	3.218	1.116
	35. 指導案が出来ていれば、授業は順調に進む。	4.227	0.888	4.347	0.908
	23. 小学校の内容なので、教材研究の必要はない。	4.836	0.585	4.891	0.371
授業の指導	46. 一生懸命やってみても、なかなか思う通りの授業ができない。	1.792	0.966	1.733	0.966
	6. 子どもたちの反応から指導の仕方や関わり方がわかる。	1.986	0.850	2.119	0.965
	4. 子どもと多く接触したからといって、良い指導ができるとは限らない。	2.971	1.369	3.040	1.296
	52. 専門教科を勉強しても授業に生かすことはなかなかできない。	2.730	1.147	2.817	1.185
	12. 目的に応じ適切な指導法を用いることができる。	3.246	0.941	3.292	1.065
	8. 子どもの生活の中へ入っていかばいほど、指導の在り方がわからない。	3.444	1.064	3.475	1.103
子どもの理解	2. 子どもと接することによって、子どもの気持ち理解できる。	2.101	0.952	1.936	0.799
	40. 子どもの教育は子どもと一体となってはできないことがわかる。	2.836	1.006	2.916	1.179
	49. 子どもに与える自分の影響力が思っていたより少ない。	2.923	1.072	3.114	1.057
	39. 家庭での子どもたちの生活についても理解できる。	3.420	0.991	3.282	1.126
	41. 学校外での子どもの行動が理解できる。	3.522	0.949	3.337	1.166
	7. 自分なりの学級経営ができる。	3.473	1.018	3.535	1.120

V. ま と め

以上述べてきた結果から実習前後における実習生の授業に意識は次のようにまとめることができる。

- 1 多くの実習生は、子どもが主体となる授業、子ども一人ひとりを大切にしたい授業という授業の主体を子どもにおくという考えを実習前では強く考えていた。しかし、実際に授業を行った後ではその通りにはいかないと考える多くの子どもを相手に授業を進める難しさを感じている。
- 2 子どもの日常の観察から、子どもの多様性に気づき、子どものよい点を見つける等の表に現れてくる行動について、少数の実習生ではあるが気づいてきたが、子どもの気持ち、子どもの考えていること等の子どもの内面にまで入って捉えることはまだ十分に出来ていない。
- 3 授業では、実習生が予想していた以上に子どもがよく反応したので、それをもって授業が順調に進んだと解釈している様子がうかがえる。
- 4 実習をかなりまじめに捉え、真剣に臨んでいる姿は伺えるが、実習期間中に自己の成長を図るだけの余裕がなく日々の生活に追われているのではないかと思われる。
- 5 教材研究の必要性は強く感じているが、それだけでは授業が十分には出来ないこと、指導案だけでは授業が進まないことは認識している。
- 6 子どもとの対応については、本心がかめず戸惑いを示している。

VI. 文 献

- 1) 小野寺俊行 教育実習生が抱く「教師の力量」「授業観」 千葉大学教育実践研究, 第4号 1997
- 2) 秋田喜代美 教える経験に伴う授業イメージの変容 — 比喩生成課題による検討 — 教育心理研究, 44, pp176-186
- 3) 貫井正納 広瀬和子 教育実習前後における学生の授業意識と指導教官による学生の評価, 日本科学教育学会研究会研究報告, Vol.12 No.1 pp1~6 1997
- 4) 貫井正納 広瀬和子 山本恵美子 鎌田正男 教育実習前後における学生の授業意識 — イメージマップによる調査から — 千葉大学教育実践研究, 第6号 pp113-123, 1999
- 5) 原岡一馬 教師の成長と役割意識に関する研究, 名古屋大学教育学部紀要, Vol.37, pp1-22, 1990

付記 本研究は日本教育工学会第15回大会で口頭発表したものを加筆修正したものである。

本研究は平成11~12年度科学研究補助金基盤研究(C) (1) の補助を受けたものである。

付表1 全体の調査データ

質 問	事前M	事前S	事後M	事後SD	
1. 何とか思いどおりの授業ができる。	3.754	1.025	3.208	1.284	*
2. 子どもと接することによって、子どもの気持ちが理解できる。	2.101	0.952	1.936	0.799	
3. 自分の指導の効果が子どもに見られる。	3.150	0.966	2.782	1.033	*
4. 子どもと多く接触したからといって、良い指導ができるとは限らない。	2.971	1.369	3.040	1.296	
5. 自分の指導に対し、子どもが手ごたえある反応をする。	3.754	0.932	2.465	1.003	*
6. 子どもたちの反応から指導の仕方や関わり方がわかる。	1.986	0.850	2.119	0.965	
7. 自分なりの学級経営ができる。	3.754	1.018	3.535	1.120	
8. 子どもの生活の中へ入っていけばいくほど、指導の在り方がわからない。	3.754	1.064	3.475	1.103	
9. 納得いく教科指導ができる。	3.686	0.941	3.460	1.189	**
10. 楽しい授業をする。	2.145	0.934	2.292	1.115	
11. できるだけ幅広い分野へ興味や関心をもつよう努めている。	1.700	0.829	2.634	1.139	*
12. 目的に応じ適切な指導法を用いることができる。	3.246	0.941	3.292	1.065	
13. 子どもの行動の観察から指導の在り方を学ぶことができる。	2.155	0.958	2.337	0.895	**
14. 自分に課題を課すことによって、自己規制に努めている。	2.594	1.119	2.762	1.108	
15. 子どもが自由に意見を言える授業が出来る。	2.657	0.936	2.644	1.075	
16. 専門的知識だけでなく、幅広い分野の知識を得よう心がけている。	1.961	0.955	2.668	1.148	*
17. 押し付けたり脅したりしないで、子どもを指導していける自信がつく。	2.295	0.922	2.733	1.031	*
18. 子どもの立場に立ってみてはじめて、子どもの気持ちや考え方が理解できる。	1.633	0.925	2.193	1.021	*
19. 子ども一人ひとりが主体になる授業をする。	2.048	0.918	2.762	1.066	*
20. 教育のことだけでなく、幅広い人間になるよう努めている。	1.541	0.799	2.129	1.033	*
21. 子どもの理解力に応じ自然に指導法を変えることができる。	3.140	0.968	3.218	1.116	
22. 子どもに密着していると、かえって子どもの真の姿を見失うことがある。	2.995	1.082	3.376	1.212	
23. 小学校の内容なので、教材研究の必要はない。	4.836	0.585	4.891	0.371	
24. 自分の持ち味を最大限に生かすよう全力で事にあたるよう努めている。	1.638	0.763	1.782	0.865	
25. 教育以外の分野にも、幅広い視野をもつことが大切だと感じる。	1.169	0.457	1.332	0.610	*
26. 授業を通して、その子に応じた何かを教えられる。	2.599	0.965	2.847	1.070	*
27. 子どもと一緒に考える授業をする。	1.884	0.851	2.683	1.074	*
28. 子どもと一緒に学習することが、自分の成長にもなる。	1.329	0.667	1.540	0.847	*
29. 現状の子どもの姿に満足せず、より高い成長を考えている。	2.145	0.960	2.545	1.051	*
30. 一般社会の領域にも関心や問題意識をもつようになった。	2.029	0.929	2.688	1.158	*
31. 子どもたちとの日常のふれあいから多くのことを学び、人間的に豊かになった。	2.237	0.938	1.752	0.880	*
32. 子ども全員が参加できる授業をする。	1.739	0.864	2.500	1.138	*
33. 子どもの成長を考え実践していくうちに、自分の成長に気づくことがある。	2.058	0.917	2.327	1.075	*
34. 新しい社会の流れをとらえて、適切な指導ができるようになった。	3.005	0.900	3.411	1.024	*
35. 指導案が出来ていれば、授業は順調に進む	4.227	0.888	4.347	0.908	
36. いろいろな子どもに出会うことで子どもの多様性がわかってきた。	1.937	0.904	1.421	0.659	*
37. 自分の役割が何で、今やるべきことは何かがわかる。	2.860	0.911	2.604	0.937	*
38. 子ども一人ひとりが主体になる授業をする。	1.990	0.960	2.832	1.120	*
39. 家庭での子どもたちの生活についても理解できる。	3.420	0.991	3.282	1.126	
40. 子どもの教育は子どもと一体になってしまってはできないことがわかる。	2.836	1.006	2.916	1.179	
41. 学校外での子どもの行動が理解できる。	0.949	0.949	3.337	1.166	
42. どんな先生とも気軽に話せる雰囲気があるのでみんなと協調してやっていける。	2.435	0.927	2.431	1.229	
43. 授業の流れがとぎれない授業をする。	3.010	1.029	3.366	1.161	*
44. 教科指導の方法を学んでいくうちに、専門的知識も深まる。	2.135	0.966	2.619	1.132	*
45. 教材研究を徹底して行うことによって、授業がうまく出来るようになる。	2.478	1.018	2.916	1.055	*
46. 一生懸命やってみても、なかなか思う通りの授業ができない。	1.792	0.966	1.733	0.966	
47. 子どもと同じ立場に立ち、子どもを人間として見る。	1.536	0.799	1.703	0.841	**
48. 子どもが間違ったり、失敗することをおそれない授業をする。	1.667	0.892	2.302	1.004	*
49. 子どもに与える自分の影響力が思っていたより少ない。	2.923	1.072	3.114	1.057	
50. どの子どもにも良い点を見つけられることができる。	2.014	0.911	1.639	0.812	
51. 経験を積むことで、学級経営のやり方が上手になる。	1.845	0.884	2.871	1.080	
52. 専門教科を勉強しても授業に生かすことはなかなかできない。	2.729	1.147	2.817	1.185	
53. 自分が成長しているかどうか自分ではわからない。	2.754	1.179	3.015	1.340	**
54. 小学校の内容なので、簡単に教えられる。	4.599	0.703	4.743	0.633	**
55. 自分の行動や生活態度などいつも反省するよう努めている。	2.135	0.951	1.985	1.010	
56. 努力しないと自分だけ残り残されそうなので頑張っている。	2.507	1.061	2.396	1.160	
57. 自分で目標をたて、常にその実践に向けて努力している。	2.242	0.985	2.248	0.857	
58. 先輩の先生からいろいろ教えられ、多くのことを学ぶことができる。	1.710	0.844	1.421	0.770	*
59. 子ども全員が参加できる授業をする。	1.802	0.878	2.520	1.125	*
60. 子どもの心をとらえた教材を用意して授業をする。	1.957	0.861	2.520	1.066	*
61. 教師が「話しすぎない」授業をする。	1.836	0.820	3.010	1.285	*
62. 子どもの意見を尊重する。	1.560	0.721	2.248	1.002	*
63. 教材研究を十分やれば授業はできる。	3.285	1.089	3.540	1.164	**

** p<0.05

* p<0.01